

武蔵野復活節祈禱会

本来無一物

——ガラテヤ書第6章——

1980年4月6日

小池辰雄

本来無である 本来無一物 即無限無量の無 十字架の絶対恩寵 聖霊の現実 無者即無限無量者、聖霊の世界 祈り

【ガラテヤ6】

1 兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘わるる事あらん。2 なんじら互いに重きを負え、而してキリストの律法を全うせよ。3 人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。4 各自おのが行為を驗し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己にあらん。5 各自おのが荷を負うべければなり。

6 御言を教えらるる人は教うる人と凡ての善き物を共にせよ。7 自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く所は、その刈る所とならん。8 己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。9 われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし。10 この故に機に随いて、凡ての人、殊に信仰の家族に善をおこなえ。

11 視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。12 凡そ肉において美しき外觀をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強う。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。13 そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。14 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかには誇る所あらざれ。之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。15 それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新に造らるる事なり。16 此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫あれ。

17 今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。

18 兄弟よ、願くは我らの主イエス・キリストの恩恵、なんじらの霊とともに



に在らんことを、アアメン。

● 本来無である

ガラテヤ書6章です。

「兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘わるる事あらん。」

パウロという人は非常に健全ですね。ちゃんと人の弱さを知ってます。

² なんじら互いに重きを負え、而してキリストの律法を全うせよ。

とかく我々は重荷を嫌がるわけですが、黙って重荷を負っている。これがキリストの律法だという。重荷を負うということは人を担うということ。人を担うということは愛するということ。だから、「キリストの律法」というのは「愛」ということです、「キリストの律法を全うせよ」とは。

³ 人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。

この6章3節が極めて大事な節です。私はこの節があって、驚いたんです。

「人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くのである」

それは何ものでもない存在であるのに、何ものかであると思うという。即ち、ルターもここで「ニヒツ」（無）と訳しています。

「彼はニヒツであるのに、何ものかであると思っている。それは自分自身を欺く

ものである」

と。即ち、

「我々はニヒツ（無）である」

と、このところではつきり言っている。私の『無の神学』の或る一つの大事な句なんです。ニヒツ、ナッシングであると。

「本来、無である」

というんだ。それなのに何ものかと思う。キリストは正に、「本来、無である」ということの本当の覚者であった。「仏」です。仏者なんだよ、キリストは。それをちゃんと悟っていた人、自覚していた人、覚者です。パウロがまたそうなんだ。こんな言葉があるので、むしろ驚くわけですね。これは非常に大事な句なんです。

「もし」ではないんだ。

「人が、有ることなのに、何ものでもないのに、何ものであるかの如く思うことは

ということ。この「もし」は本当はいらない。ギリシャ語では「もし」という字はあることはあるが、しょうがない。あつても、パウロよりもつと強く読まなくてはいいかん。時々、私は乱暴なようにだけでも、本当はそうなんです。



● 本来無一物

これは「六祖壇經」^{だんぎよう}の中の言葉です。禪宗の第五祖の弘忍禪師^{ぐにん}に弟子が七百人もいました。その中で一番優れた弟子の神秀^{じんしゅう}が第六祖の印綬を——衣鉢を継がせること——もらうところの弟子だとみんなが思っていた。ところが、ある時、偈^げを作らせたんです。そしたら、その神秀は、

「身是菩提樹 身はこれ菩提樹^{ぼだいじゅ}」

心如明鏡台 心は明鏡台の如し

時時勤拭 時時に勤めて拭^{ふつ}せよ

莫使惹塵埃 塵埃^{じんあい}を惹^ひかしむること莫^なれ

（この身は菩提（悟り）を宿す樹のようなもので、心は本来清浄で曇りのない明鏡のようなものである。それで、いつも煩惱の塵や埃を払ったり拭いたりして綺麗にして、心や身が汚れないよう修行を怠^{おろそ}かしてはならない。）

と書いた。我々の身体はもと菩提樹だ、無量の悟りをもっている樹のようなものだ。心はきれいな鏡の台のようなものだ。時々、一生懸命でこれを磨け。布で磨いてよくその塵を払え。名鏡に塵がかかるようなことをしてはいかんと。そう書いた。みんな感心した。さすがは神秀だと。ところが、米つき小僧がいましてね。慧能^{えのう}というんですけれども、それがその句を見て、そのわきに、この句を書いた。

「菩提本無樹 菩提本樹無^もく」

明鏡亦非台 明鏡も亦^{また}台に非^あず

本来無一物 本来無一物

何処惹塵埃 何^いれ^ずの処^{しよ}にか塵埃^{じんあい}を惹^ひかん

（神秀は、身は菩提樹とか心は明鏡台とか言われますが、私には菩提も煩惱も身も心もなく、本来無一物なのです。それで、塵や埃のつくこともないので、払ったり拭いたりする必要はないはずではないですか）

と。そしたら、この句の方が神秀の句よりもうひとつ次元が高いんです。それで第五祖がこの小僧に驚いた。これは本ものだと。

菩提は、悟りの境地はもと菩提樹というような樹でもない。明鏡なんて言っているけれども、その台があるわけではない。本来無一物だと。我々は本来無者であるということです。「無き者」「メーデン・オーン」だと。何処にか塵埃を引かん。本来は無一物で、鏡でなければ、菩提でもないから、塵の引きようもないではないかと。

「努めてこれを拭^ふせよ」

なんていう必要も何もない。至道無難の世界です。その境地に入ると、難しいの難しくなのなんてそんな境地ではないと。

それで、禪宗の第五祖は、



「お前に衣鉢をやる。ただし、みんながお前のことを妬んで、大変なことになるから。お前は逃げて行け」

と。夜中に彼を自分の部屋に呼んで、袈裟けさを与えて、

「お前はこれから遠くへ行け」

と。ところが、神秀は、もううと思つたがもらえない。衣鉢いはつは別なやつがもらつてしまった。それで、

「とんでもない。あの野郎がもらつたか」

というわけで、みんなが追つかけて行く。弟子どものうち屈強な恵明えみょうというやつにとつとう捕まつてしまった。それで、

「袈裟が欲しいか。あげますよ」

と。ただし、この衣には信がかかつている。「力をもつて争うべけんや」と。

「そんな暴力でもつて争うようなものではないぞ。持ち去るなら持ち去つてくれ」

と言つたんだな。たいへんなもんだ。それで、袈裟を投げてやつた。袈裟を取り上げようとしたら、

「ついにこれを拵こしらえるに山の如くして動かず」

という。衣が山の如くして動かないという。ということは、霊の力がかかつているんだ。だから、取ろうとした腕が靈縛されてしまう。動かなくなる。何も衣が重いのではない。取ろうとした彼の暴力の腕が審きにあつて動かなくなる。日蓮が龍の口で斬られようとした時に、日蓮が「南無妙法蓮華経」と言えば、斬ろうとした奴がぶつ倒れたでしょ。あれと同じです。それで、参つたというわけだ。これは本ものだと。

●即無限無量の無

即ち、本来無一物という世界が一番強いんです。「有るの無いの」なんて言っているのではない、この場合の本来無一物というのは。これは絶対無なんです。相対的な無ではない。有と無との対立の相対的な無ではないですよ、この無というのは。私が言っている「無」もそうです、本来無一物というのは。それがいわゆる「有る」に変わるのではない。即無限無量なんです。即無限無量の無です。その無限無量というのが聖霊なんです。それが智慧あわれとも働き、憫みとも働き、愛とも働き、靈的な神癒的な力とも働き、自由自在です。

ゲーテが『ファウスト』の始めの方に書いています。人間の賜つた理性は神性の影である。そして、この神性の影を人間は悪いことに使う。動物より悪い。理性を悪用すると言う。さすがにゲーテは分かっている。

ブラウニングが有名な「ラビ・ベン・エズラ」の詩の中で、

「私が決してあり得なかつたところのもの、私においてすべての人が嘲つてけなし
たもの、これが私が神に対する値打ちであつた」



と言う。こういう気合もやっぱり似ているですよ。自分が成り得なかったもの、人がみんなけなしたものの、その自分のダメさ加減が実は神においては、神の前に自分の価値であった。そのような自覚は、ブラウニングという人も無即無限無量の角度の男です。

「たとえ一を得ずとも百万を望め」

と言った。ということは、

「たとえ一つができなくても、その気魄は無限無量なものであれ」

ということ。それは、テニソンよりかブラウニングの方が上です。私は英文学を勉強しようと思ったら、ブラウニングをおそらくやったね。イタリア語をやるうとしたら、ダンテをやったに決まっている。イタリア語をやる人は少ないから、イタリア語をやった方が良かったかもしれないな。ドイツ語なんかたくさんいるからね。

そういう本来無一物ということ。これがパウロがここで言っているところの、

「人が有ることないのに、本来無者であるのに、いわゆる相対的な有者であると思

っているのはとんでもない自己欺瞞である。とんでもない間違いだよ」

と。人間の小さな持ち前の力が、神さまの力に比べて、ローソクの光や蛍光灯が、太陽の光に対して何物のですか。無に等しいではないですか。そうしたら、太陽の光をまともに受けた方がいいではないですか。無限無量になる。若い人にはこれがなかなか分からないんだ。みんな元気がいいからね。

「それでも、私はやるぞ」

なんて。やっていいよ。けれども、やるならば、無限無量なるものを受けとりながらやってください。持ち前の力でやったら、くたびれるよ。

●十字架の絶対恩寵

4 各自^{おのおの}おのが行為^{ため}を驗し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己に

あらん。5 各自^{おのおの}おのが荷を負うべければなり。

6 御言^{あなご}を教えらるる人は教うる人と凡ての善き物を共にせよ。7 自ら欺^{あざむ}くな、

神は侮^{あなご}るべき者にあらず、人の播^まく所は、その刈る所とならん。

因果応報だぞという。

8 己が肉のために播く者は肉によりて滅亡^{ほろび}を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。

これもいい言葉だね。ガラテヤ書というのはやっぱり凄ところだ。ルターが宗教改革のあれにただけのことがある。御霊によって播くものは御霊によって永遠の生命を刈り取るという。

9 われら善をなすに倦^うまざれ、もし撓^{たゆ}まずば、時いたりて刈り取るべし。10 この故に機^{おり}に随^{したが}いて、凡ての人、殊^{こと}に信仰の家族に善をおこなえ。



11 視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。力こぶを入れて書くぞと。大きな字で本当に書いたかもしれない。

12 凡そ肉において美^{うるわ}しき外^{みえ}観をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強^しう。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。13 そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。

これは正にユダヤ人に言っているような言葉だね。

14 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。

十字架の絶対恩寵は我々の誇りであると。パウロは「誇り」という言葉をよく使う。もともと彼は自分を誇りたい男だったから。ところが、自分を誇ることはやめた。とんでもない話だと、キリストにやつつけられた。

「自分を完全に贖いとしてくださったこの十字架の他に誇るものがあるか」

と。これを本当にほめたたえるという。

之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。

我と世との間には十字架がある。どっちから考えても。十字架を媒介としなければ、本当に世を愛することもできません、世を赦すこともできません。

さっきの「重きを負え」というのは、「キリストと偕に十字架を負う」こと。これが愛ですからね。どのみち、「十字架が本当の関係をつくるものだ」ということです。私たちの人間関係だつてそうです。直接関係をやっていると、好きだ嫌いだと、ゴタゴタゴタ妬み争いが始まる。十字架が立っているところには、それが消えていく。人間というのは間違いを犯したり、まあ、いろいろだよな。それをいちいち、

「あれがこうした、こう言った」

なんてやっていたら、お終いですよ。まん中に十字架が立っていなかったら、友情関係は成り立たない。師弟関係も成り立ちません。私に躓く人は、十字架が立っていなかった人だからです。

いわゆる立派な牧師さんのところに行つていけば、それは安全運転かもしれない。けれども、靈的空間には走れませんよ。私の世界は靈的空間を走っている世界だからね、皆さん。終いにはみんな放物線的に信仰がダメになる。私のところに来れば逆になるんです。私ははっきり言えるんです、それが。人間小池なんてものは問題じゃないから。皆さんは、反つて幸いなんですよ、私みたいなしょうがない野郎がこうやって話をしているから。それが立派な先生だとダメなんだよ、みんな。私を奉^{たてまつ}つてしまつてね、

「ああ、小池先生は」

なんて。

「小池なんて野郎は」



くらいで結構ですから。そのかわり、

「あの小池という野郎の中にあるものは、これはちよつとそこらでは見つからない」

という気持ちになったら、皆さんは本ものになる。それだけのことを私ははっきり言えるんです。もう、無者だから。本来、無なんだから。本来、無一物なんだから。

「わがうちにあるものを汝らに与う」

と。2年も耳鳴りがして、お医者さんにかかつて薬を飲んでもどうにもならない人が、私が耳に30秒くらい手を当てて祈ったら、ピタッと治ってしまったではないですか。どういうことですか。私の力ではない。

●聖霊の現実

私は昨日はちよつと珍しく少し風邪ぎみだった。床の上に起き上がって、キリストの中に祈りこんだ。もう、スーッと治ってしまった。その時は本当に祈り込みますよ。キリストの熱が燃焼してくると、風邪の熱なんかどこかへ行ってしまうよ。皆さん、生命賭けの祈りをしなさいよ。生命賭けというのは、キリストの中に生命を賭けるんです。いついずこにおいてもできます。

この使徒たちの信仰と同じ次元に、同じ質に入らなかったら、つまらないです、信仰なんて言ったって。今の一般の教会、無教会なんてのは問題じゃない。本当ですよ。私はいくらでも、聖名のためには憎まれます。仕方がない、真理だから。もう遠慮しないで、そういうことは。今まで遠慮が強すぎた。この秋はひとつ、藤井先生の記念講演でもやるかな。一人でやるよ、一人で。藤井先生の中には或る烈々たるものがあつた。御霊とははっきりとは言い切れないけれどもね。とにかく、生命賭けのものがあつた。

いや、さつきね、K君がどこかの古本屋で藤井先生の署名してある本を見つけてきた。署名ばかりでない。聖書の文句が書いてある。あのMさんに当てた本だよな。彼女が亡くなつてから、家の人があれを売ってしまったんだろう。よくお花をもってきてくれる人でした。私は懐かしかったね、何だか、そこに藤井先生が出てきそうな感じがした。K君が驚いたのも無理がない。私が発見するはずだったな(笑)。もう何とも言えない字ですよ、あの字は。本当に先生の人格が滲んでいます。もう何とも言えませんね。

今でも覚えているよ。柏木で告別式があつたときに、

「内村鑑三先生の屍しかばねを乗り越えて進む」

と彼は言った。それを叫んでいた藤井先生はもう既に胃潰瘍でやられているんです、青黒い顔して。私は黙示録を最初に先生の所で聴いて、最後にまた黙示録で終わった。私は詩を書きますけれども、これは黙示録が主題になる。それは法螺ほらで終わってもいいよな。とにかく、その百万を望むブラウニングのような魂だから。

だから、私は今度の『詩篇珠玉集』(小池辰雄著作集第四卷1980年刊)に書いたでしょ。



「私の世に対する関係は十字架であり、聖霊である」

と書いた、もうひとつあとに。聖霊の現実がなかったら、もう何ごとも本ものにならない。パウロが

「十字架なり」

と言った後に、もう一遍パウロが

「聖霊なり」

と言ってくれば良かったんだけど、それを書いてない。パウロさんは今、天界で

「やっぱり、そうだよ」

と言っているよ。しょうがないよ、この聖書というものは。まだ言い切れないで困っているんだから。言い切れないで困っているところは、こつちで補ってあげませんとね。

「聖書を補う」なんて言ったら、普通の教会では、とんでもないことになってしまう。

「そんな勝手なことがあるか」

なんて。聖書に書いてあるわ。

「二字も加えたり、減らしたりしてはいかん」

なんてどこかに書いてある。そんなことが書いてあったって、それを儀文的に私は解釈しません。無限無量な響きが聖書の後ろから響いているんだから、その響きを言うだけの話です。ただこれに付け加えて新しい聖書をつくりますなんて、そんなことを言っているのではない。

●無者即無限無量者 聖霊の世界

17 今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩^おびたるなり。

「イエスの印」というのは十字架のことです。このキリストの印、スティグマ、十字架を負っているものだと。パウロは徹底的に「キリスト」だね。彼は何と言つても第一の弟子です。ヨハネは深いとか何とか言いますけれどもね、パウロの構造にはかなわんですよ。それはもうパウロは、キリストを除いては第一人者です。パウロは一切の思想やまた宗教に対して、それを全部包含するような驚くべきものを持っている。やっぱり、選びの器だね。ダマスコ途上で復活のキリストがパウロをひっくり返したんだから。まあ、これは大変なことです。パウロはパリサイ中のパリサイなんだから。キリストはパリサイと戦った。パウロと一騎打したって、もちろんパウロは負けた。

皆さん、聖書は本当にそういう現実ですから。そうしたら、何かしらんけれども、楽しくなりますよ。至道無難になる。中に入ってしまうと。無難だからといって、あぐらをかくのではない。無難であるその世界に入るから、神・キリストに鍛えられることを喜んで進んで行くんです、喜んで。いわゆる努力でなくなる。もちろん、我々は一切のことにぶつかって鍛えられて行かなくてはならない。しかし、それはもはや自分の努力でなくなつて、



上からの力がしょっちゅう裏付けしてください。

「求めよ、さらば与えられん」

というが、「求めよ」ということは、

「自分を投げ入れろ」

ということなんです。「こっちに自分が居て何かを求める」なんていう、そんな呑気なものじゃないですよ、この「求め」というのは。

「私の中に投身せよ」

というのが「求めよ」です。

「私の中に投身せよ。さらば私自身をお前にやるぞ」

というのが、「求めよ、さらば与えられん」ということです、はっきり言うと。私はもつと自分で乱暴な訳をつくつて、実に簡明な解釈をそこに作つてやろうかな。本当にそうだから。何をゴタゴタ言っているかと言いたくなってしまう。

ありがたいね、私は学校をやめて。これからが私の生涯だから。いや、私は皆さんに本当に期待します。本当に驚くべきことが生ずる。自分でも不思議だと思ふことが展開していきます。

これがこのガラテヤ書第6章の主要点です。無者、即無限、無量者、聖霊の世界。そして、この十字架の印を帯びている御霊のひと。御霊のひととは、十字架の印を帯びていなかったら、本当の御霊でなくなるんです。十字架抜き、聖霊なんてものは、そんなものは私は信用しない。

それでは、後は祈りましょうね。もう、自分なんていうものはぶつつぶれてくださいよ。

「ぶつつぶれてください」

とは、自分でぶれるのではないんだよ。キリストの十字架の中に自分を投げ入れれば、自然にぶつつぶれて、

「ああ、もはや我なし」

と。そうすると、俄然すごいことになってきます。何も力むことはいらん。ただ、投げ入れだけ本ものになってください。投げ入れだけはね。しかも、もう一つ言えば、

「十字架において既に投げ入れられてある。そのことに気がつけ」

ということですよ。これはもう表現できないです、正直。ウワーツと力が来ますよ、祈りますからね。

では、私が先に祈ろうかな。皆さん全員に祈っていただいて、また或る人たちを指して祈ったり。何も特別大きな声を出さなくていいですから。沈黙の雄叫びという。銘々の無理のないところで。



● 祈り

では、祈ります。主さま。何と申し上げていいかわかりません。あなたの福音が私たちの心に迫り、魂に突入し、そして、ああ、これが二千年前も今日も同じ現実である。聖書は常に新たな、常に現在であると、いよいよ受けとらしめられ、感謝いたします。パウロがさきほど書いた手紙の如くであります。どうぞ、私たち、この天来の音信、その文字の背後に現に上から響いてくるところの響きを直ちに受けとり、またその現実^{じじつ}に身を投げ入れて、聖書と一体となることが本ものであることをいよいよお願いいたします。

このようにして、まあ、何という驚くべき書であるか。万巻の書ありとも唯だこの一巻の書が一切であることを思います。どうぞ、この兄弟姉妹と今日は、このキリストの復活の日に、私たちは本当に霊的な甦りをせしめられ、感謝いたします。

かくして、本当にあなたが十字架ですべて本来無一物であることをハタと受けとらしめてくださって感謝いたします。私たちが十字架によって本当の無一物にされ、無限無量の聖霊の事態に招き入れられ、もはや何と表現すべきかを知りません。絶言絶慮の事態、ここに無限無量の言葉が、み光が、またおん力がやって来まして、ありがとうございます。

この兄弟姉妹たち一人びとりはみなもはや、自分を顧みません。ただあなただけを、あなたの中に自分を投身し、神さまのみ懐に在り給うたキリストさまのごとく、私たちも、主さま、あなたのみ懐の中に自分を入れまして、そして、あなたと一如、

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

とパウロが何回も言いましたが、全くその通りです。感謝いたします。どうぞ、

「われキリストと偕に十字架せられたり。もはや生くるあらず。キリストわがうちに在りて、御霊のキリストわがうちにありて生き給うなり」

と。聖名を讃え奉ります。

私たちの一切はあなたのご栄光の顕れ、また本当に福音の身証、身をもつて証しすることの他何ものでもありません。どうぞ、そのようにして、次から次へと日を送っていくことができますように。特に、若い人たちがこのことに目覚めましたら、もうエライことになります。今、世界はいろんな意味において行き詰まっておりますが、また混沌としておりますが、いまこそ本当に原始のこの福音の世界に、使徒たちの信仰の世界に直結しなければ、突破できないことを思います。どうぞ、いよいよ、あなたの本当の天来の、

「われ汝らを愛しむ。汝らに天国を与う」

との、その聖国をいただきながら、その聖国をまた私たちの身边に現じ、一人二人三人と、悩める者、苦しめる者、求める者にこの驚くべき音信^{おとずれ}を身をもって証し、そして助けにくことができますように願ひ奉ります。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉る。アーメン！

どうぞ、この十字架を瞑想し、一人びとり深くその中に入り、自由にお祈りください。

